指定校番号	27062

別紙様式２

平成 27 年度生徒指導集中対策指定校及び生徒指導実践指定校 「特別活動の取組事例」

学校名	府中市立府中小学校	校長氏名	池田　哲哉	生徒指導主事氏名	中國　達彬

取 組 事 例 名　『児童会活動　スタート時期の指導　～児童会役員への指導を中心に～』

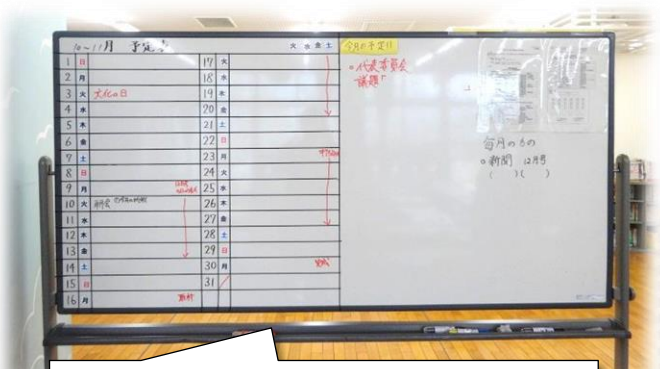
取 組 の ね ら い『キーワード・・・教師主導から児童主導へ』

これまで本校の各児童会活動については，教師主導型の活動が多く，児童が主体的に動く機会（場，活動）を十分につくることができていなかった。その結果，全校児童（児童会役員を含めて）の児童会活動への関心は低く，各児童会活動を通して児童の「主体性」や「自治的活動への意欲」を十分に育てることができていなかった。そこで今年度は，「児童が主体的に活動できる場をつくること」を目標（ねらい）とし，教師がその目標を念頭に置きながら指導を継続することとした。

取 組 の 具 体 的 内 容『キーワード・・・ＰＤＣＡサイクル』

「児童が主体的に活動できる場をつくる」ことを目標に，児童会役員が選出された直後（２月中旬）から次のような手立てを講じた。特に児童の動きに「ＰＤＣＡサイクル」が生まれるように留意した。

①スケジュール表（ホワイトボード）を制作する。【Ｐ】
②各取組について「担当者」「〆切」を決める（スケジュール表を使って各進捗状況を可視化する）。
　また，すべきことの詳細は「To Do リスト化」することで作業漏れを未然に防ぐことができた。【Ｐ】
③活動場面では極力教師からの介入を避ける。介入（助言）はできるだけ活動前後にまとめて行う。【Ｄ】
④活動ごとに“教師→児童”“児童→児童”の「評価する場（褒める場）」を設定する。【Ｃ】
⑤次の活動に向けた話し合いの際に，話し合い（議論）の具体的な方法について指導する。【Ａ】



スケジュール表を使って行事や〆切，進捗状況を可視化しています。

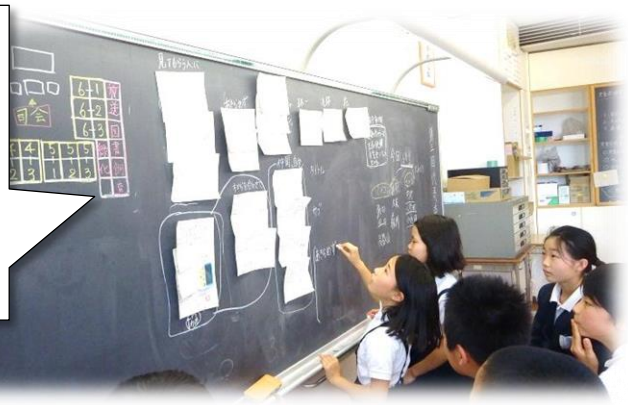
スケジュール表と併せて「To Do リスト」を作成し，各活動の進捗状況を確認しています。

（特に初期段階は）各活動後に「肯定的に評価し合う場」を設定しました。

取組の課題・創意工夫『キーワード・・・教師の介入方法』

課題① 「アイデアの出し方」や「意見のまとめ方」といった話し合いの形式自体に慣れていないため，どうしても教師が介入せざるを得ない状況が（頻繁に）生まれた。

創意工夫①
初期段階においては，積極的に介入することにした。司会原稿（手本）を提示したり，「ブレーンストーミング」「KJ 法」といった方法を教えたりと，技術的な側面は積極的に指導した。
※写真は「ＫＪ法」を使って問題を解決している場面



課題②児童から意欲的にアイデアが出されることもあったが，校内体制の中で実現不可能になってしまうことが多く，「アイデアを出してもどうせ無駄なのでは…」という雰囲気が生まれた。

創意工夫②
校内体制を踏まえたうえであらかじめ条件（時間・期間，場所，使える物など）を提示しておく。

創意工夫②
方法論で行き詰まった場合には，常に目的（＝児童会目標）にかえらせる。
「そもそもあなたたちは〇〇がしたいわけではなく，■■な学校が作りたいわけですよね。〇〇以外でできることを考えましょう。」
※写真は児童会目標が完成した後の場面

取組の成果（効果）『キーワード・・・主体的な活動→自信→さらなる意欲』

①児童が主体的・協働的に動く姿が増えた。「ゴール」とそれに対する「役割」「方法」が明確になることで，児童は一つひとつ教師から助言や確認を得なくても自分たちの判断で物事を動かすことができるようになった。

②活動ごとに「評価する場」を設定したことで，児童に児童会役員としての手応えや自信をもたせることができた。そして，こうした手応えや自信が，次の活動へのさらなる意欲にもつながった。

２学期になると，各活動も教師の介入なく進めることができるようになりました。

運動会では，児童会役員のアイデアにより，保護者・地域の方からのメッセージを掲示する「メッセージボード」を作成しました。

今　後　の　展　開『キーワード・・・スタート時期も児童主体の動きを』

①旧児童会役員と新児童会役員とがいっしょに活動する期間を約１ヶ月間（２月中旬～３月中旬）設け，その間に児童会役員としてのノウハウ（仕事や話し合いの技術など）を児童から児童へと直接引き継いでいけるようにする。

②旧児童会役員に対して，１年間の児童会活動を振り返っての「成果」「課題」をまとめさせておく。そして，児童にとっても，教員にとっても，より効率的で充実感・達成感を感じられるような児童会活動をめざす。

他校へのアドバイス『キーワード・・・教師の仕事は，「仕掛けること」と「評価すること」』

「教師の主な仕事は仕掛けをつくること，そして評価すること」という意識で取り組みました。これまではＰＤＣＡサイクルの中でも，「Ｄ」や「Ａ」に重点を置いて指導してきましたが，今年は（特に初期段階は）「Ｐ」と「Ｃ」を大切にしながら取組を進めてきました。